

2015年度立命館大学校友会 東日本大震災復興支援事業 東北応援ツアー レポート

ツアー参加者氏名 高田全康

卒業年 1966年(昭和41)

卒業学部 法学部

参加コース

C 岩手県コース

現地を訪問して思うこと

人の命の絆のつながりの大切さ・優しさ・逞しさを過去から現在へ
そしていちあるかぎり互いの命を大切に未来を信じて羽ばたこう

記

未曾有の大震災から4年8か月が過ぎた11月22～23日の2日間、校友会企画の貴重な東北応援ツアーに参加させていただいたことに心から感謝です。立命館大学校友会事務局をはじめ岩手県校友会菊池 宏会長様と役員ご一同様の手厚いお世話に深い感銘をいただいたことを生涯忘れない。今後もこの企画が末永く東北被災地支援のために継続されることを願い、参加申し込みの結果、選ばれる幸運に恵まれたなら継続参加したい。

①大いなるもの働きによる思いがけない岩手県への招きに感謝・・・

東日本大震災発生以来、小生は昨年3月、宮城県の七ヶ浜町へ我が町の京都府精華町社会福祉協議会からの復興支援ボランティア活動に参加した。社協手配の夜行バス（往復車中2泊と現地で1泊）の3泊3日の行程で貴重な現地体験をした。また、来年も東北への思いを抱いている間に1年が過ぎた本年5月、地元精華中学校が会場で開校のシニアースクール(註1)に参加して小学校の同級生で立命館大学理工学部卒の校友T氏と再会した。彼は今年3月、単独自費で大阪・京都からの夜行バスでいちご栽培で有名な宮城県亘理郡山元町に復興支援ボランティアに出かけていた。その話を聞いた私はさらに東北復興支援の思いが昂^{たかま}っていた。

註1：中学校の空き教室利用でシルバー年代の高齢者が同年代の講師のもとで自分の向学心に基づき、過去において未体験の各種の学び Ex.英会話、絵画、華道、茶道、写真、造園、パソコン、農園、家庭科・手芸、コーラス、など全部で17講座の中から1～2の好みの講座（年間10回程度）を選び学習する。同じ町内の高齢者同士の親睦を深められることと中学在校生とのふれあい等、世代間交流につながるメリットを生んでいる。

T氏とのシニアースクールでの話題の中で立命館大学校友会便りに同封案内のあった東北応援ツアーに互いに関心が有ることを共有、意気投合して個々にCの岩手コース参加に応募した。気がかりは定員(20)を上回る応募者多数の場合は厳正抽選制で有ることを知り、どちらかが抽選漏れとなった場合でも単独参加することを決め、校友会事務局からの抽選結果通知を待った。共に行けるように神に願い続けた結果二人とも選ばれたのだ。校友会事務局からの観光目的でない校友会活動の趣旨を大いに汲んで、二人が共に参加でき

ることとなった実現に、大いなるものの働きが岩手への招きとなったことに深く感謝した。

②快晴で迎えたJR盛岡駅からのツアー初日 現地集合時間内に参加手続きを終えて・事務局手配の2日間お世話になる岩手交通バス。運転席後ろに座席に向けた大きな垂れ幕。「まんずよく おでえんすたごど！」と書いた行程表の挨拶に迎えられた。校友会事務局と岩手県校友会役員ご一同様の温かいご配慮に、夜行での疲れも吹っ飛んだ。そして参加者ひとりひとりに岩手県校友会の袋が渡されたこと。封書の表書きの下にR・Alumni / IWATEとあって下線部の単語は見慣れていないが想像の結果Alumnus (卒業生・同窓生の複数形)と判断した。普段聞きなれていない言葉(単語)へのこだわりだった。童心に帰って覗く封筒の中味は興味深々だった。これからの学習行程の行き先にかかる買い物マップ2枚、校友手書き作成のもので人の温もりが感じられるもので一つは陸前高田お食事・お買いものマップ、もう一つはひらいずみ飲食店マップで実に被災地の悲しみを乗り越えて頑張る姿を楽しく表現されていた。次に岩手県自慢の有名な「わんこそば」にちなんだ「ふきふきわんこクロス」1点、その日の宿泊先三陸復興国立公園・陸前高田一望の地、未来に向かって今蘇るキャピタルホテル1000の案内1点、道中のバス車中でどうぞのおやつかわいい2袋、一関市の佐々木製菓の名代の厚焼きせんべい、二戸市の(株)岩手屋割しみチョコせんべいであった。そして極めつけは陸前高田の酔仙酒造のワンカップ活性原酒「雪っこ」(註2)などあり、校友会の心尽くしが一杯入っていた。応援ツアーのはずがもてなされツアー?の感、京言葉ではもったいない!ことだった。

註2: ツアード中での飲酒は慎むことの事務局の条件付きであったので帰宅してからの一献は最高であった。

③参加者一同名札を首にかけていよいよ応援ツアー校友会選抜者の使命感を旨に出発。バスが動き始めて、立命館大学校友会事務局からスタッフの紹介とオリエンテーションがあった。岩手県校友会菊池宏会長のご挨拶、岩手交通2日間のドライバー菊池壱雄さんの紹介と孫と同年?のバスガイドさんの挨拶に続き、今回の被災地の活性化に貢献を志す参加者一人一人に自己紹介とツアー参加の動機を語るマイクが廻された。震災発生年の秋から始まったと聞いたこのツアー、岩手・宮城・福島の3コースに分かれて続けられて来た中で、今回で2~3回目の校友がおられることにAlumniの熱い志の感動を得た。小生の参加動機は①記述の通りの主旨を報告した。10:00頃~

④2日間の岩手の心のふるさと訪問の旅: 内陸部の遠野市・平泉町と震災大津波被災地釜石・大船渡・陸前高田の三市両極端の姿に接して学んだこと。ツアー訪問地での感動・・・
(その1)最初の訪問地が柳田国男氏の著作で有名な「遠野物語」の現地・遠野市訪問(11:00頃)だったことが大いなる感動となった。関西では、折しもNHKBS3で盛岡・遠野を舞台とする朝ドラ「どんど晴れ」が再放映中で、その最中の今回の東北支援ツアーに恵まれたことも何かの縁と思われた。ツアーで遠野の伝承園一帯を訪問の後に、改めて朝ドラの映像を通して座敷わらし、おしら様、河童橋の河童さんとの再会に胸躍らせることとなった喜びは一入。岩手・遠野の伝承園は陸奥の春夏秋冬の暮らしの様子が手に取るように伝えられていて人の命の営みの尊い繋がり、強さ・逞しさ・喜び・悲しみ・希望がよみとれ

た。遠い^{いにしえ}古から現代に至る人の命の暮らし・営みが心ある人にはしっかりと伝承されるよう維持整備されているのに目をみはった。これから遠野市を訪ねる人たちだけでなく来てくてもこれない人に、日本中に、世界中に伝承する努力を惜しまず続けられんことをと願った。佐々木喜善記念館を中心とする、南部曲り家、乗り込み、昔話、お蚕神堂、壁絵、工芸館には岩手の精神基盤の存在を感じた。太平洋リアス式沿岸部の震災の悲喜こもごもを春夏秋冬を通して物心両面で暗黙の内に支えていると解釈した。

午後 1:00 頃、伝承園駐車場出発、道の駅遠野風の丘を後にして釜石市に向かう車中でのこと。校友会事務局で用意された東日本大震災発生当日に釜石市役所屋上から市役所勤務の立命OB校友が大津波襲来の様子を収められたDVDを釜石駅前到着までに是非鑑賞をと披露された。陸前高田の宿泊地で開催予定の学習会（現地で働く立命OB校友が語る被災体験発表）に備えての予備知識をとのことであった。2:00 過ぎJR釜石駅前に到着して驚いたこと。遠野からの国道 283 号線を挟んで駅向かいの新日鐵住金（株）釜石製鐵所と駅前の広場と駅周辺の佇まいに復興整備推進の活気を見た。世界遺産登録された橋野鉄鉦山を思いつつ、駅前の近代製鐵の父大島高任像と市民と深く結びつく釜石製鐵所の高炉記念碑の燈火を見て、車中で見たDVDの大災害の街の姿からよくここまで復興されたことに感銘し、まだまだ継続される努力の實りと多くの災害犠牲者のご冥福を祈った。3:00 頃釜石駅発～三陸鉄道南リアス線（貸切学習列車）36.6 kmで約 50 分かけて大船渡市盛駅に向かう。平田、唐丹、吉浜、三陸、甫嶺、恋し浜、綾里、陸前赤崎、盛駅着 3:50 頃だった。学習列車の専属ガイドさんの説明で釜石駅から盛駅までの間にある 19ヶ所のトンネルが南リアス線を津波から守ってくれたことが、2014 年 4 月の早期路線再開に繋がったとの事、釜石駅を含む盛駅までの 10 の各駅周辺の震災津波襲来時の有様と復興の現状を聞かせてもらって各地区の特色を生かしながらの懸命の努力が確実に未来に向かって実り育まれていることに明るい未来を信じた。これからも出来る限り己の関わる公私の活動範囲での支援を続けたいと思った。岩手の太平洋沿岸の各地域は狭いV字型の湾が多く津波の高さは如何に深いか、被災に至る時間も早く被害も大きかったことが分かった。4:30 頃宿泊のホテルに到着して 5:00～6:00 の震災津波防災学習講座に臨んだ。岩手で公務員としてご活躍（釜石市、大船渡市、陸前高田市）の校友会OB 3 氏の震災時から現在に至るまでの想像を絶する苦難の道のりと今後の復興抱負を聞き、全国どこにおいても起こりうる地球規模の自然災害から自分の命を自分んで守る日常の心構えの大切さを教わった。現地において日頃の生活におけるいざという時の防災・避難の認識と訓練を重ね続けていた地域においては人の命の犠牲者数が少なかったことが如実に語られた。岩手校友会のOB 諸氏のこれまでの被災からこれまでの復興へのご尽力・ご活躍に深く敬意と感謝を表しつつ、これからも続く復興推進への道のり支援を続けたいと思った。立命館大学の校友会活動、互いの人生における出会い通して、これまでとこれからの交わりを大切にしたいと心した。夜のとばりの降りた午後 6:30 からの交流会における校友会の親睦にも感謝。

〈その2〉一夜が明けた2日目早朝、高台に位置するキャピタルホテル 1000 からの震災

後の陸前高田松原方面の眺望には深い悲しみに襲われた。日頃の小生の早朝のジョギングを当地でも行った。まだ薄暗い午前 5:15 にホテルフロントに申し出て出発、見渡す限り復興工事中の周囲の中を走る県道・国道の街頭照明だけを頼りに震災犠牲者の追悼の走りをした。約 7~8km、ホテル~高田高校入り口バス停~陸前高田物産センター~国道 340 号~一本松駐車場~タピック 45 慰霊碑~津波の高さ 15.1m 標識塔のあるセルフ岡本(6:20 頃)~夜が明けた工事中道路~高田高校入り口バス停~ホテル帰着 7:15 だった。ことの甚大さにふれて無念の悲しみ苦しみを嘔みしめ、犠牲者のご冥福と早期復興祈願を願ってのことだった。汗を流して朝食後、昨日に続く岩手交通ツアーバスが 8:45 ホテルを出発して間もなく奇跡の一本松、気仙中学校跡に至り、バスガイドさんから震災発生時の状況を詳しく聞いた。その後、小生が朝走った国道 340 号を懐かしみながら車は陸前高田市竹駒町を経て一路平泉町の中尊寺に向かった。850 年前に高僧慈覚大師円仁によって開かれ、1105 年奥州藤原氏初代清衡公によって着手建立された世界遺産登録の霊場中尊寺への巡礼(昼食含む 10:00~13:30)であった。いただいた資料に「鎮魂・平和希求・万物共生の祈り」として清衡公の「浄土への想い」が紹介されている通り、今回の校友会東北応援ツアーの目的の精神が清衡公の中尊寺建立供養願文の精神に繋がったと思った。・・・当時の戦乱時代とは様相が異なるにしても 910 年が過ぎた現代、大自然が相手の東日本大震災によって多くの尊い命が犠牲として召されたことへの人の命の慰霊・鎮魂の祈り(過去から現代に至る脈々と引き継がれて来て亡くなった多くの人々のため)を中尊寺できたとつくづく思った。まだまだ続く震災復興への道が中尊寺の歴史のように人の世の幸せにのために永遠に活動され引き継がれて行くようにと祈った。中尊寺から新幹線一関駅着 14:00 で 2 日間のツアーが終了した。

⑤結びに 立命館大学校友会東北応援ツアー岩手県コースで出会いをいただいた事務局岩手県校友会の皆様にあらためて感謝だった。同時に遠い昔から繰り返されるいつ起こるか分からない地球規模での避けて通れない人類への試練、震災・津波の悲劇の克服、それでも未来を信じて受けて立つ復興努力と命のリレーの懸命の営みに微力ながらもエールを送り続けたい。レポート作成中の 12/9 京都新聞朝刊の記事に、2008 年 12 月ノーベル賞受賞された理論物理学者益川敏英氏(75 歳)がストックホルムでの記念講演で自らの戦争体験を語った時のことを「戦後 70 年私の軌跡」として紹介されていた。それは「まず人間として人類を愛すべき」の叫びだった。そしてその叫びがイーハトーブ(愛するふるさと・愛の理想郷)いわての姿・神髄発展のこれからの未来に繋がっている姿と確信した。忘己利他のハートはいつまでも若々しく年を取りません(笑)。(完)